

阿井にあった鉄砲地鉄（じがね）とその技

平成二十四年四月「奥出雲町景観条例」が施行され、それを起点として平成二十六年四月には「奥出雲たたらと棚田の文化的景観」が認められ、引き続き平成二十八年四月には「出雲国たたら風土記」鉄づくり千年が生んだ物語」として日本遺産の認定を受けた。

認定理由には【たたら製鉄は、優れた鉄の生産だけでなく、原料砂鉄の採取跡地を 広大な稲田に再生し、燃料の木炭山林を永続的に循環利用するという、人と自然とが共生する持続可能な産業として日本社会を支えてきた。また、鉄の流通は全国各地の文物をもたらし、都のような華やかな地域文化をも育んだ。今もこの地は、神代の時代から先人たちが刻んできた鉄づくり千年の物語が終わることなく紡がれている。】と記されている。

さらに「たたら製鉄に由来する資源循環型の農業」が国の農業遺産に認定され、現在世界農業遺産への認定申請作業が進められている。ここ数年たたら製鉄にスポットがあてられ、奥出雲の地域振興・観光の目玉として行政・民間が一体となった利活用と適正な保存活動が重要な課題となっている。

さて、かつて多くの鉄師によってなされていた奥出雲の鉄山経営は、やがて郡内の卜藏・絲原・杙・伊豆・櫻井に加えて吉田村の綿屋（田部）の六鉄師にその支配が集中し発展してきた。郡内の五鉄師にはそれぞれ特徴的な経営があり、地域における産業発展はもとより地

域文化の創造に大きく寄与してきた。

うち阿井櫻井家たたら最大の特徴は、何ととっても、日本一と言ってもいい鉄砲地鉄を生産する鍛冶技術を持つていたことである。鉄砲地鉄とは、鉄砲の銃身を作る鉄の事である。その特質は刀と違い、強力な爆発力に耐える堅さと粘りがあり、ゆがみのないことである。近江の國「国友」には七十三軒の鉄砲鍛冶屋と約五百人に及ぶ職人がいたという。その鉄砲鍛冶達は、鉄砲本来の使命である命中率の高さを極めるべくその技術を磨くと共に、鉄砲地鉄に最もふさわしい鉄を日本中に求めた。その結果、その鍛冶集団の年寄役の国友藤兵衛一貫齋は、「鉄は出雲・播磨のものが良い。また出雲の菊一という鉄があるが、これが最も良い鉄である。」と有馬成南筆「一貫齋藤兵衛伝」に記している。

この「菊一鉄」こそ、阿井櫻井家三代の直重により、正保元年（一六六四年）上阿井呑谷において製鉄業を始め、そこで作って全国に売り広めた平割鍊鉄である。菊一とは鍛冶職人の名前であり商標であった。可部屋は第三代直重よりこの菊一印の鉄を売り出し、第五代源兵衛利吉は松江藩より御鉄砲地鉄鍛方を拝命し、藩を通じて国友をはじめ全国各地に送り出した。

江戸時代の鉄砲鍛冶発展に尽くした可部屋の技術は、郷土の誇るべき財産である。

